

園 長 通 信

ちぐさこども園 園長 櫛渕 洋介

2026.07.21 Vol.30

《「まねる」ことで人は育つ》

サッカーW杯の盛り上がり

7月20日にスペインの優勝で幕を閉じたサッカーW杯。日本代表の健闘は、日本国内でも大いにサッカー熱を盛り上げました。園内でも、午前中に行われたスウェーデン戦を子どもも大人も一緒にTV観戦し、皆で日本を応援して盛り上がりました。

園庭では、年長児や小学生を中心に連日サッカーが展開されています。中には、メッシ、エムパペ、C.ロナウド…といった有名選手の名前を言いながら、彼らをイメージして、ドリブルしたり、シュートしたりする子もいます。

面白いのは、（当然ながら）プレーを再現することは難しくても、ゴール後のパフォーマンスポーズを結構忠実に再現（まね）していることです。ヒーローの決めポーズをまねるのと同じように、ゴールポーズをまねることでスター選手になった気分を味わっているのかもしれません。

過剰模倣

発達心理学では「過剰模倣」という現象が知られています。これは、大人が行った行動のうち、本来は必要のない動きまで含めて子どもが忠実にまねる姿を指します。例えば、机をトントン叩いてからバナナを食べるという行為を大人がすると、子どもがバナナを食べる前に机をトントン叩く真似をするといった具合です。

これはどうやら人間特有の現象のようで、チンパンジーは報酬(バナナを食べる)に関係ない行為は真似しないそうです。さらにいうと、人間でも2歳頃までは必要な行動を中心に模倣し、無意味な行為は省略する傾向が強く、「過剰模倣」は3～6歳で顕著に発達すると言われています。

一見すると「なぜそんなことまで？」と思える行動ですが、子どもは単に動作をコピーしているわけではありません。「この人には意味があるはず」「大切なことが隠れているのかもしれない」と考えながら、真似て

おり、人間が文化や知恵、価値観を継承するための重要な資質と考えられています。

子どもは「見て」「まねて」「学ぶ」

こども園でも同じような姿がたくさんあります。先生の言葉遣いをまねる子、学童の小学生や年長児の遊び方をまねる年少・年中児、友達の優しい声掛けを自然に使うようになる子。こうした「まねる経験」を通して、遊び方だけでなく、人との関わり方や思いやりも少しずつ身に付けています。

だからこそ、私たち大人自身が子どもたちの「お手本」であることを忘れてはならないと感じます。研究では、「意味」を理解して真似るのではなく、「信頼する大人だから」真似ることが多いことが実証されています。子どもは、大人の言葉以上に、その姿を見ています。困っている人への接し方、失敗したときの向き合い方、「ありがとう」や「ごめんなさい」の伝え方。その一つ一つが、子どもたちの未来へと受け継がれていきます。

何かを教える、伝える前に、「見られている」自分の日々の振る舞いを意識していきたいと考えています。

【1学期トピックス】

●4月から新建屋の利用開始

3月末に新建屋が完成し、4月からちぐさ学童クラブが本格利用を開始しました。スペースも機能も充実した施設で楽しい毎日を送っています。

●6月からちぐさルームズ(療育事業)がスタート

6月1日から、ちぐさルームズ(児童発達支援、放課後デイサービス)がスタートしました。こども園や学校等の集団生活の中で困り事がある子どもを、個別に支援する事業です。

ちぐさこども園や学童クラブと連携して環境を整えていくことで、多様な子どもが心地良く過ごせる場を作りたいと考えています。

●7月に東光寺幼稚園の先生方が来訪

当園の午後の保育の視察に栃木県(足利市)の東光寺幼稚園の先生方11名が訪れ、より良い保育について協議しました。